

『嵯峨天皇甘露雨』を読む

平 田 澄 子

竹本筑後掾が晩年に語った時代浄瑠璃の一つである『嵯峨天皇甘露雨』は、数ある近松作品の中では、どちらかといえば低い評価を与えられてきた作品である。同時期上演された『天神記』『大職冠』『相模入道千匹犬』『娥歌かるた』などに比し「著るしく劣った作」というような不評も買っている。その一因として、一作の眼目となるべき三段目が悲劇的盛り上がり欠けているということが挙げられよう。因果悲劇として見た場合は失敗作ということになる。また、全編に、皇位争い、親の敵討ち、輪廻転生譚という三つの筋がほぼ並行して展開され、お互いの有機的つながりが十分に説明できていないことが問題とされている。

しかし、一方では「本説を持たない劇を輪廻転生に

よって仕組んだことは、他の浄瑠璃に見られない特徴である」と本作を好意的に見る立場もあり、本稿はこの好意的立場に導かれてこの作品を再検討した結果のささやかな報告である。

一 魂の彷徨

本作の内容は、すでに先学の指摘にある如く、近松が古くは『古事記』の猪甘の連の故事、『今昔物語集』『本朝高僧伝』、古浄瑠璃の『以呂波物語』などにある弘法大師と守敏僧都の法力比べの説話、民間に伝わる付喪神伝説などに取材して、前述のような三つの筋をよりあわせ脚色したものであるが、全段を貫くものは、億万劫の過去において大乘般若秘密経を誹謗した罪で

五百生の生死の業を繰り返さねばならなくなった男が、四百九十六度目に猪甘の連として生まれ、大初瀬皇子に父を殺され流浪の身となっていた顕宗天皇の糧を盗んで処刑され、幽霊となって空海に救いを求めるといふ一段目から、この迷える魂が以下修羅、畜生、餓鬼の三悪道を経て、五段目に無事昇天して五百生目を果たすというその輪廻転生譚にあると言える。

流浪の魂は、まず猪甘の連の末孫である、位争いの首謀者悪皇子大海原の家臣悪右馬の尉仲成（薬子の乱の藤原仲成がモデルか）の病死した亡骸に入る。蘇生した仲成が大海原の軍勢に加わって、嵯峨天皇の忠臣橘勝藤に討たれる一段目切が修羅道である。二段目で仲成の魂は彼の勘当した嫡子で、今は土民に身をやつす又二郎（仲経）と彼の妻の夢の中に予告して、夫婦の飼いの牛の胎内に宿る。しかしこの牛は悪皇子に味方する守敏僧都が天皇調伏の秘法に用いる油を取るために、深山に連れ出され、夫婦の目の前で猛火に掛けられ畜生道の苦しみを味わうことになる。又二郎が油の壺を割ると油の中から父の魂が現れ、女房の懐に入る。

「女房が懐に入れて我が子と生るるも。眼に見へず心

にも知るべき様こそなかりけれ」のこの場の詞章が示すように、三段目に展開される又二郎夫婦の子供のたどる運命が、父仲成の餓鬼道に墮ちるさまであることを、彼らは知らない。

二 花世という女性

さて、その三段目切、全編の山場は雪に埋もれた狼谷の貧家である。大海原皇子から、父を討ったのは勝藤だと知らされた仲経が、九十三になる勝藤の父をおと囚として連れ隠し、人間の心があるなら親の首を請い取り我と勝負を決せよという勝藤宛ての高札を立てる。

そこに勝藤と、別れた妻の花世が現れるが、花世は仲成の娘、仲経の妹であるためお互いに敵同士となった縁者達の中で、最も複雑な立場に立つ女性である。しかし夫に「親が重いか舅が重いか」と問われれば、

「男子の身には親が重し。女は親より舅なり」とためらいもなく義理を選ぶ。彼女の答えがこう出るまでにはそれなりの経緯があった。まず、彼女の実父仲成は希代の悪人であり、嵯峨天皇方に付いているこの娘夫婦を勘当同然に扱っていたこと、彼女は夫の両親から

信頼され、姑が舅の世話を頼むと遺言していたこと、そして何よりも夫が親か舅かの選択を妻に任せ、たとえ仲成と刺し違えようとも自分から夫婦の縁を切る気はないと誓っていたことなどである。しかしこの夫が仲成の首を討った時は、父の敵を討つ気もないこしぬけ女の色に迷った男と世間から指さされるのが口惜しいと涙ながらに口説くので、「夫に恥辱は与えまじ」と彼女はあっさり納得し、夫と飽かぬ別れをしたのであった。

三段目口の場面では嵯峨天皇の仮御所に勝藤の老父が鳩杖にすがつて参内し、老いゆえに役立たぬ身を嘆く所へ、夫と別れ木の実売りとなった花世が登場、彼女の孝心に感動した天皇は、嫁の願いに任せ、舅を女の家で養うように勅定する。

前述した仲経の家の場面の前には、留守の間に兄夫婦に舅を盗み出された花世が狂乱の体で、雪の中を舅を求めさまよう場面があり、高札の前で夫との再会となる。

現代の劇画にもなりそうな暗く淀んだ人間の執念やオカルト的事象が描かれる中に、この花世の、その名

の如く優しく美しい人間性は本作での一条の光りである。彼女が舅への思いを語った一節の中に、次のようなくだりがある。

金の鎖でつないでも限りの知れた御老体。せめて寝臥しの抱きかかへもお心置きなき様に。宮仕へ申ししたし

ここは同じ近松の『冥途の飛脚・新口村の段』で遊女梅川が駆け落ちの相手忠兵衛の実父孫右衛門に語る次のせりふ、

わたしが舅の親父様。丁度お前の年配で格好も其の儘。外へする奉公とはさらさらもって思はれず。お年寄った舅御の臥悩みの抱きかかへ。宮仕えは嫁の役御用に立てば私も。なんぼうか嬉しいもの

の傍線部分とほぼ一致している。「新口村の段」は孫右衛門の父性愛と梅川の優しさが観客の胸を打つ、現行人気舞台の一つであるが、近松の描こうとした花世像はこの梅川とも通ずる、近松理想の女性像であったに違いない。

『嵯峨天皇甘露雨』の成立は、筑後掾の没した正徳四年九月十日以前ということである。^註作中に孫右衛門

のような慈父が登場する初めと考えられる『冥途の飛脚』との関係でその初演時期をさらに押し詰めて推定できるかもしれない。

三 「赤子殺し」の意味

親の敵仲経を一討ちと家内に押し入った勝藤夫婦は、そこに老父の無事な姿と貧に餓えた兄夫婦と彼らの赤子を見る。しかも母親に抱かれた赤子は死んでいた。争い合う兄と妹夫婦の間に割って入った老父が齒のない口で涙ながらに息子を叱る。そして自分は勝藤をおびき寄せる罠であったに過ぎず、仲経は自分を敵の親を殺してはさもしい意趣返しと人に笑われ侍の名を下すと実の親以上に手厚く世話してくれ、女房は赤子に飲ます乳まで吸わせてくれたと語る。それもすべて親の敵を討ちたい一心からのこと、このような武士には自ら首を差し出して討たれるべきを、寝込みを襲うとは何事かというわけである。肉体の衰えには比例しない強い精神による気迫の籠もった意見なのである。

ところが、この、老父が若い女房の乳房を吸うという挿話が、「醜怪とも思える趣向を売り物にした作で

はないか」との悪評を被^レっている。けれど、これは実際の演技で見せられたわけではないし、作者が同じ老父のせりふの中で種明かしをしているように「二十四孝」の崔南の妻の故事の引用である。中国の話の中の姑をこの場に合わせて妹の舅に変え、極貧の仲経らが困の老人を養う最後の手段とさせて、次に展開される赤子の死の話への伏線としたのである。中国の故事も近松のテキストも比喩的な叙述であって、視覚的なイメージを観客に喚起させことさらに醜怪さを売り物としようとしたわけではなからう。

スタインベックの『怒りの葡萄^{ブドウ}』最終末部の「シャロンのバラ」が思い出される。こちらは今世紀アメリカの貧農家族の物語である。悲惨な生活の果てに、赤子を死産した若い娘ローザシャーンは悲しみの中で、飢え死にしかけている初老の労働者風浮浪者に胸を開き、乳房を含ませる。「彼女の」唇は閉じられて神秘的な微笑を浮べた」と小説は終わっている。作者はここに人間の生きようとする本能的な力を表現したという^事。

『怒りの葡萄』の最後もショックな場面として強く印象に残るものであるが、偶然とはいえ中国、日

本、アメリカと、時代や国境を越えて母性の本能に関わる事柄が取り上げられ作品に記し留められているのは面白い。

さて、近松の話の女房からは、ローザシャーンに感じるようなたくましさを崇高さは感じられないものの、せめて切羽詰まった夫婦の誠意だけはくみ取れるのではないだろうか。しかも夫婦は、飢えて泣く赤子の声を老人に聞かせまいとわが子に刃をあてて殺してしまった。一見、救いようのない不自然な人情と悲惨な状況である。親の敵勝藤を討つため、そして敵の老父を無事生き長らえさせて武士の面目を立てるために、かくも簡単に我が子を殺せるものであろうか。確かに日本の武士道とは実際こうした「むごさ」を抱え持つものであったことも事実なのであろう。しかしこの場面に限り、その赤子が悪人仲成の転生したものであることを知る観客はそれほどの悲惨さを感じずにすむ。むしろ何も知らない仲経が「子殺し」イコール「親殺し」と知った時の悲痛な心境を想像してはらはらすのであろう。

結局仲経夫婦は最後までこの事実を知らず、四百九

十九生目の餓鬼道を経て、輪廻を繰り返した一つの魂が赤子の胸から鏡のような光を放って雲に入るのを、我が子の成仏した証拠と信じ、勝藤とは和解、二人にとっても天下にとっても共通の大きな敵大海原皇子を討ちに出立して三段目は終わる。

仲経夫婦の愁嘆場は、赤子の正体を知る観客にとつて感情移入できるものではないから、この場面を「三段目の悲劇」の列に置くと物足りなさは否めないであろう。しかし転生譚という伝奇的世界と、いつの世にも普遍の、孝行を元とする父子兄弟の愛情物語が巧みにより合わせられたドラマと見れば、この三段目も、近松らしい世界として看過しにくい存在感を示すことになりはしないだろうか。また、孝行も転生譚も近松後期の作品に繰り返されるモチーフではあった。

注1 木谷蓬吟『大近松全集十二巻』解説

注2 白方勝氏『近松浄瑠璃の研究』第二編三の(三)「近松の因果悲劇」

注3 森山重雄氏『近松の天皇劇』

注4 『室町時代物語大成』所収の絵巻『付喪神記』は付喪神と真言の関わりを語っている。

注5 『義太夫年表』。馬場憲二氏「嵯峨天皇甘露雨」の上
演について」

注6 この場を描く江戸絵本のさし絵はやや奇怪な印象を受
けるが。

注7 新潮社文庫本（大久保康雄訳・解説）による。